

戦後台湾における日本語俳句の進展と 日本の俳句結社 ——『七彩』・『春燈』・『燕巢』とのかかわりを中心に——

磯田 一雄

1. はじめに：戦後台湾の日本語俳句をどうとらえるか
2. 発足当初の問題——「台北歌壇」と「七彩俳句会」との関係——
3. 『台北俳句集』に見る台北俳句会の本質的課題
4. 春燈台北句会の成立と台北俳句会との内面的かかわり
5. 燕巢俳句会との関係——台湾歳時記の編纂と刊行をめぐる——
6. 終わりに：日本俳句の普遍性と台湾俳句の独自性との相克ないし緊張関係

キーワード：台湾俳句の独自性、日本俳句の普遍性、黄靈芝、表現の道具としての言語、台湾季語

1. はじめに：戦後台湾の日本語俳句をどうとらえるか

戦後台湾における日本語俳句の推移を、①「ポストコロニアル現象」⁽¹⁾から、②（日本語以外の言語でも詠まれる場合を含めた）「国際俳句の一環としての普遍的な現象」⁽²⁾に至る

途上にあるものとして捉えるのが本報告の基本的な立場である。

台湾では植民地期の言語・文化状況（日本語の普及率が高かったこと、短歌や俳句が皇民化の道具とされたこと）と戦後の国民党支配における本島人の言語的疎外とが切り離せない。それは近現代東アジア史に規定された一時的な現象（対象は台湾「日本語人」に限定される）とこれまで見られてきた。しかし最近は「学生俳句大会」に見られるように、「日本語世代」の俳人の指導を受けつつも、対象が若い世代の台湾人にも及ぶ普遍的な現象として捉えられる可能性が浮上している。

日本の植民地支配により、植民地に移り住んだ日本人によって短歌や俳句などの日本語短詩文芸がもたらされた。植民地統治期間の長かった台湾の場合はその典型と見られる。台湾では多くの俳句や短歌の結社が形成されたが、その代表は短歌の「あらたま」と俳句の「ゆうかり」だった。こうした結社はすべて日本人が中心になって結成された。

(1) この点については、拙論「台湾における日本語文芸活動の過去・現在・未来——俳句を中心にその教育文化的意義を点描する——」『成城文藝』第197号2006年12月、「植民地期台湾における日本語短詩文芸と国語教育——日本語を通じての生活表現の日本化と近代化——」『植民地期東アジアの近代化と戦後の展開——1930年代～1950年代——』独立行政法人日本学術振興会平成18年度～平成20年度科学研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書、研究代表者・磯田一雄、2009年3月、岡崎郁子『黄靈芝物語——ある日文台

湾作家の軌跡』研文出版、2004年、序章、黄靈芝「戦後の台湾俳句——日本語と漢語での——」『台湾俳句歳時記』言叢社2003年、279頁以下、などを参照されたい。

(2) この点については『TAIWAN HAIKU/Eucalyptus』創刊号（2010年6月）及び第二号（2011年6月）、義守大学応用日語学系、尤嘉麗普達斯編輯委員会編、を参照されたい。第二号には俳句の国際化に関する論文も掲載されている。

敗戦により台湾ではこうした文芸活動は一時全く姿を消し、関係日本人はすべて帰国した。戦前期に日本語短詩文芸の教養を獲得し、戦後の国民党支配による中国化(北京語使用の強制)に馴染めなかった台湾人は「日本語人」となり、短歌や俳句が復活する要因となった。やがて国交断絶以前に來台した日本人を媒介として、日本の短歌や俳句結社と接触するようになり、その支部が台湾に結成され、次いで自立するという形で、台湾人を中心とする短歌会や俳句会が生まれた。その代表は「台北歌壇(現・台湾歌壇)」(1968年、初代表:孤蓬万里=本名・呉建堂、1926-1998)と、「台北俳句会」(1970年。会長:黄靈芝=本名・黄天驥、1928年台南生れ)である。それぞれが40年以上の歴史を持っている(どちらの結社も創立当初は戒嚴令下で、「台湾」を名乗ることはタブーであったため、実質的には全台湾に及ぶ組織でありながら台北を名乗った。台北歌壇はその後台湾歌壇と改名したが、台北俳句会は依然改名していない)。

これらの結社は、日本の短歌や俳句の結社と密接な関係の下で創始されたが、代表ないし会長は一貫して台湾人である点が、戦前期との根本的な相違である。しかし台湾人の詠む日本語短歌や俳句の意味や価値、組織としての句会や歌会の日本の歌壇や俳壇からの独立性・自立性という点ではなお問題なしとしなかった。それが日本の結社とのかかわりに現れている。俳句の場合、戦後の台湾俳句を代表する結社「台北俳句会」は、独立した組織ながら、その成立・発展の過程では、直接の母胎を提供した台北歌壇のほかに、いくつかの日本の俳句結社とのかかわりがあった。創始にかかわった「七彩」、一種の競合関係をもたらした「春燈」、更に季語の問題を通じて台湾の地域的アイデンティティの表現の幅を広げるとともに、俳句の構成の普遍性を国際的に提起する結果となった「燕巢」

がその主なものである。「七彩」との関係は従属～自立の関係であるが、「春燈」との関係は有志会員の内輪のもので、公の関係はなかった。これに対して「燕巢」との関係は一応公的な相互協力関係であり、ともかく10年近い協力により一つのユニークな成果が生れている。

こうした過程を通じて、日本の植民地を脱したはずの台湾でなお日本語で俳句を台湾人が詠むことの意味は何か。それは所詮「垂流」に留まるのではないか。また台湾人としてのアイデンティティの表現を保障するか、などの問題が生れてくると考えられるのである。(さらに中国語(北京語)や台湾語(閩南語・客家語など)によって詠まれる「俳句」も生まれつつあるが、この点については今回は立ち入らないこととする。)

2. 発足当初の問題——「台北歌壇」と「七彩俳句会」との関係——

「台北俳句会」は1970年7月に台北で発足した(これは戦後台湾の「代表的」な俳句結社だが、「唯一の」結社とはいえない)。戦後台湾の俳句結社や短歌結社の成立には、日本の俳句結社・短歌結社がそれぞれかかわっている。短歌は「からたち支部」として発足、「台北短歌研究会」として独立し、歌誌『台北歌壇』を創始して、まもなくそれが結社自身の名称にもなった。

いっぽう俳句の会は「七彩」主宰の東早苗が第三回アジアペンクラブで1970年6月來台した折、当時短歌研究会の会員だった黄靈芝が東らを台南に案内した際、「台湾にも俳句の会がほしい。発表する場がなければ『七彩』を提供するから」と促され、その後で開かれた東の歓迎俳句会を契機に「台北俳句会」が発足することになった。それは同時に「七彩支部」になるということでもあり、実態は「短歌研究会=台

北歌壇」(当時の主宰＝呉建堂)のメンバーが俳句も作る(俳句会にも参加する)という形であった。「七彩」は俳句の国際化に関心があり、台湾に支部を作ることに熱心だった。本来は「女流俳人のみによる研究集団であり、すぐれた女流俳句作家の育成を志す真摯な場」だったが、台湾に進出するために「外国はこの限りにあらず」とわざわざ例外規定まで設けたのである⁽³⁾。

こうした成立の事情に見られるように、台北俳句会は一応台湾人中心の句会ではあるものの、二重の意味で独立した組織とはいえなかった。つまり構成員が「台北短歌研究会」及び「七彩台北支部」と重複していたのである。台北俳句会としての独自性を発揮するには、こうしたしがらみからの独立を達成する必要があったということである。

当時七彩主宰の東早苗は「台北支部」を「一粒の種」と宣伝していた⁽⁴⁾。最初は「台北俳句会七彩支部」と呼んでいたが、間もなく単に「台北支部」と呼ぶようになる。台北俳句会側から見れば、「七彩」の支部であるということは、俳誌『七彩』に投句して選句を受けることであり、会長の黄靈芝をも含めて身柄を全面的に「七彩」に囲い込まれてしまった観があったのではなかろうか。黄靈芝によれば「乞食が施しを受けているような感じがした」という。彼は早くから「七彩を抜きたい」という意向を会員に漏らしている。「七彩」が性急に「台北支部」として包摂しようとした点に問題があったように思われる。

結局「七彩台湾支部」は一年余しか続かなかった。ひとつには会費納入をめぐるトラブルがあったということで、この事情を黄靈芝は自身の「七彩退会届」のコピーを添えて会員に伝達している。しかし本質的な原因としては、やは

り一種の植民地支配を受けているような感じがあったためではなかろうか。最初の会員俳句集の出た翌1972年に入ると『七彩』に投句する会員が激減し、遂には皆無になった。また会誌『七彩』の刊行は年三回のみであり、台北俳句会の会員に対する「七彩俳句」の影響は、あまり大きなものではなかったと思われる。こうして台北俳句会は、「七彩台北支部」というしがらみから抜けることになった。

3. 『台北俳句集』に見る台北俳句会の本質的課題

既に見たように、初期の台北俳句会の会員は会長になった黄靈芝をはじめ、ほぼ全員が台北歌壇の会員だった。これは初めの頃の『台北俳句集』の投句者のほとんどが孤蓬万里(本名・呉建堂)編著『台湾万葉集』(1994年)・同統編(1995年)及び『孤蓬万里半世紀』(1997年)——すべて集英社刊。以下まとめて『台湾万葉集』等と記す——にその名が見られ、その詠んだ歌や経歴が掲載されていることによって裏付けられる。

したがって最初は「台北俳句会」(七彩台北支部)即「台北歌壇」(からたち台湾支部)という状況だったが、なかには俳句にはあまり興味がなく、句会には一時参加したがやがて止めてしまった人や、出るには出たが自分は「短歌が主・俳句は従」と割り切っていた人もいた。逆に俳句のほうが面白くなって、やがて歌壇を去る会員も現れた。こうして俳句会と歌壇とは徐々に分離していった。最近の「台北俳句会」では「台湾歌壇」とかかわりのある人がかなり減っているが、俳句と短歌の両方、さらに川柳も、という人がなお少なくない⁽⁵⁾。

台北俳句会の会長は発足以来黄靈芝で変わっ

(3)「巻頭言」『七彩』1971年3月号。

(4)東早苗「一粒の種——台湾の俳句——」『七彩』

1970年11月号

(5)『台北俳句集 36』(2006年)で見ると、在台寄稿

ていない。彼はいわば台北俳句会のシンボリック的存在である。日本語俳句の会長であるのに彼は2004年秋正岡子規国際俳句賞の授賞式に参加するため一度来日しただけである。会員の多くがしばしば日本旅行を楽しみ、日本の吟行句を多く発表しているのと対照的である。

台北俳句会はまた七彩支部と重なっていた創立の翌年から、会員の句を各自20句ずつ掲載した『台北俳句集』を年度ごとに発行している。時に刊行が遅れることもあって、1970年7月～2011年9月の40年間に刊行されたのは第37集（表題は「中華民國96年度」）までである（別に2010年12月『台北俳句会四十周年記念集』が刊行されている）。

会の規模（会員数）を投句者数（句会の出席者数ではない）の変遷から辿ってみる（末尾の【資料】参照）。第1～5集は25人前後であるが、第6集からは次第に増えて、第12集で最高（74名）になり、以後第16・17集がともに73人の投句を集め、第28集までが「高原期」となる。第11集（1982年）以後、28集（2001年）の66人までの約20年間、第20集が60人とやや少なかったのを除けば、ほぼ65人前後の数が一貫して維持されている。ピークは80年代末で投句者数は70人を超えていたが、第30集以降は50人台に下がる。

『台北俳句集』には「はじめに」または（第7集以後は）「あとがき」がある。第3集までの「はじめに」はわずか4～5行の短文で内容もごく簡単だ。第1集はまだ「七彩」の下にあったためか、ごく形式的な文言しかないが、第2集からは収録された句について言及している。第2集ではまだ「稚なく拙ない句も多い」としているが、第3集では「同好の私たちが、よしんば蝸牛の歩みであったとしても、着実に、

芸術の階を登りつつあるこ〔と〕は喜ぶに堪えよう」と、出来はともあれ姿勢の着実さだけは認めている。

第4集の「はじめに」は「当地の俳壇としては実りの多い年であったと思う」とし、句の創作態度としては「読者よりも己を欺かざることが大切」といい、「私たちにとって俳句とは、それが日本人に通ずるか否かは問題ではない。文学作品たりうるかどうかは問題なのである（下線引用者）。その点数人の句友が頭角を顕わしてきたことは嬉しいことである」と指摘する。4年経ってようやく俳句の質が向上してきたこと、その基準を日本にとらない（台湾的アイデンティティを目指す）ということを示しており、台北俳句会の存在意義の最初の実質的な確認である。ここまでは一応「順調に」俳句会が成長してきたかに見える。

ところが第5集の「はじめに」では、逆に会員の俳句に苦言を呈している。「振り返ってみて、いささかマンネリズムの危険を覚える・・・語呂に甘えただけで詩にならないし、十七音で独立した一句を成さねば俳句とは云えないだろう」という。逆に言えば、十七音では独立できない、「さらに幾語かを加えて」短歌に仕立て直せるような、つまり「短歌の半分」のような句が多すぎる、といたいであろう。

第6集の「はじめに」では正岡子規の『随問随答』からこんな事例が提示される。

人を見て吠ゆる犬あり桃の里
人を見て犬吠え出すや桃の里
桃の村見知らぬ人に犬吠える
の三句のうち「いずれが物になり候や」という読者の間に子規は、どれも句になっていない。

商人を吠ゆる犬あり桃の花 蕪村
とすればよろしかろう、と答える⁽⁶⁾。これを

↘ 者45名中『台湾歌壇四十周年記念』（2008年12月）に詠草を出している人が23名とほぼ半数いる（磯田一雄「皇民化期台湾の日本語短詩文芸と戦後の再生」

『天理台湾学報』第19号、天理台湾学会、2010年）
(6) 「人」を「商人」に「桃の里」を「桃の花」に変えることで句のイメージがずっと明確に豊かになるよう ↗

受けて「日々に生産される膨大な数の俳句」はほとんど前三句の域にとどまっていると黄靈芝はいう。台北俳句会の句も「俳句になっていない」「日が経てば、やがては屑籠に捨て去られる運命」の句が大部分といたいかのようだ。

第7集からは「あとがき」となり、内容も拡大しているが、第9集までは会員の俳句についての実践的な俳句論というより、俳句の本質論を展開している。第8集では「言語や文字は文芸にとっての道具に過ぎない。もし道具が本質を左右するほどの力を持つものならば、梅原龍三郎の絵はフランス美術であり、ベートーベンのピアノ曲はイタリア音楽である。…文芸もまた、他のもろもろの芸術と同じく、国境を持たないことを知るべきである」という。これは台湾人が作る以上、日本語で俳句を詠んでも、それは台湾文芸であって日本文芸ではない、といたいのであろう。

第9集ではさらに進んで、「外国人が、日本人となら変りのない純粋な日本語で…短歌や俳句を作ったりすると、多くの人はず目や目を睨んでびっくりする。そして——大抵はそれでお仕舞いである。つまり、われわれの作品は作品として取り上げられる前に、単なる「日本趣味」としてかたづけられてしまいがちなのである。事すでに「趣味」であるからには、とても本場物にはかなわない、という先入意識が誰の胸にもあるからであろう。」という。台湾人の詠む日本語俳句を、日本の俳壇から垂流視されることへの不満がはっきりしている。そしていわばその対策として「われわれの俳句が一席の地を与えられるためには、変貌ないし変質することも方法の一つである」といい、「われわれは九官鳥のように他人の声音を真似るよりは、地声で己の歌をうたったほうが、その道の玄人には

快く耳に響くことをするべきであろう。台湾という風土の中に棲息しているわれわれが、いたずらに吉野桜や盆踊りに見惚れ、刺し身や蒲焼をのみ食べたがったとしたら、折角、台湾に住んでいる意義がなくなろうというものである」という。これは俳句の「台湾化」につながる主張といえよう。後の「台湾季語」の制定（台湾歳時記の編纂）に連なると理解される。

だが「垂流視」されるのにはそれなりの理由もあると考えられる。それは台湾俳句の質である。第10集の「あとがき」では、俳句は形の上では短歌の上の句に相当するが、内容的に「短歌の半分」であってはならない、それを可能にするのは象徴的な手法であるという。「俳句とは要するに象徴的なり合せにより、形而下をもって形而上を表現する文芸である。俳句がこのような象徴に頼らなければならないのは、詩形が短いからであり、またここに《写生》の奥義を置かねばならない」というのである。

「俳句は内容量としてはあくまでも《短歌の全部》でなければならない。ゆえに、短歌をつくる要領で俳句をつくってしまうと、結局は《短歌の半分》しかでき上がらず、それは同時に、たとえ十七音を費やしていたとしても、同じく《俳句の半分》にしかならない（下線＝引用者）」と『台北俳句集・第十集』の「あとがき」ではいう。第5集での指摘の発展とみられる。

この「短歌の半分」という批評は、台北俳句会で昔からなされたもっとも普遍的な批評言であったように思われる。実際古くからの会員は「黄靈芝先生は、《君たちの俳句は短歌の半分だ》とよくおっしゃっていました」と証言している。これは何を意味するのだろうか。

「七彩」からの独立は早い段階で達成できたが、「台北歌壇」からの独立はそう簡単ではな

↘ に思われる。桃の里の犬は見知らぬもの（商人）に吠えるので、人を見たら誰にでも吠えるのではない。また「見て吠える」に決まっているから、「見て」は不

要となろう。なお黄靈芝は原典によらず記憶で引用しているので、句の一部に誤りがあるが、論旨に大きな影響はない。

かった。既にあった短歌会のメンバーがそのまま「俳句会」員になったのであるから、短歌は熱心によっても俳句は「おつきあい」程度という「お遊び的俳句」や、短歌と俳句の表現上の違いに無頓着な「短歌的俳句」ともいうべき傾向があったということではなかろうか。その事情が『台北俳句集』の序文（はじめに）や後記（あとがき）に反映されているのではないか。

それとも関連するが、もともと歌壇のメンバーがそのまま俳句会のメンバーになったのだから、「短歌的」な句を詠む人が多くても不思議ではない。短歌系の会員抜きに台北俳句会は成り立たないが、さりとて「短歌的俳句」ばかりでは困る。こういうジレンマがあったことが、黄靈芝に上のように言わせたのではないか。この批評は今日に至ってもなお繰り返されている。

少し先のことになるが、『台北俳句集 第15集』（この集だけ奥付がないが、前後の集との関係から1986年夏頃刊行と推定される）のあとがきで、黄靈芝は「…だが一旦寄って来た同好者が次々と去って行ったことには、《遊び》としての俳句を《お遊び》と考えたためからの失望に堪えられなかった人もいただろう。…折角芽生えかかった種子を種子のままに枯らしてしまった私の不徳…よき主宰者に恵まれなかったことも、会の運営を困難ならしめた原因の一つである。かくして辛酸を極めたわれわれの十五年の経営は、十分に半世紀の年季を持つに相当する。…十五年間に集まった同好者は一八六人を数えるが、今はその半数足らずが残っているに過ぎない（下線＝引用者）」とやや自己批判気味に書いている。会員の句に対する彼の容赦ない批判の裏面として留意する必要があるだろう（ただし黄靈芝は「披講」の形よりもむしろ文書にして自分の意見を言う。台北俳句会の毎月の会報の内容の大部分は投句の批評であ

り、これはかなり早い段階から始まっている。）以上『台北俳句集』の第15集までの「あとがき」からすると、台北俳句会には次のような問題があったのではなかろうか、と推測される。

- 1) 俳句をお遊びとしてやっていたのではないか。
- 2) 短歌的俳句——短歌の半分にすぎない俳句——という質の問題。
- 3) 俳句の指導が必ずしも適切になされていなかったのではないか。
- 4) 日本俳句の本質を維持しつつ、亜流にとどまらぬ台湾俳句の独自性をどう発揮するか。

4. 『春燈』台北句会の成立と台北俳句会との内面的かかわり

黄靈芝は台北俳句会の特徴の一つとして、「日本の場合だと自分の気質に合った俳句社を選んで身を寄せることができるが、台湾での俳句会は一応ここしかなかったから、結社というよりはグループである」といっている⁽⁷⁾。確かに台湾全土に及ぶ句会としては今日もここしかないといえよう。しかし平行した句会がないわけではない。1980年に「台北春燈句会」（現・春燈台北句会）という俳句会が生まれ、今日まで存続している。しかもそれは単に台北俳句会と併存してきたというだけではなく、ずっと小さな句会ではあるが、そのメンバーの多くが台北俳句会の「俳句に熱心な」な会員と重なっており、その存在は決して無視できない。

台北春燈句会を創始し、指導者となった人物は、当時在台していた加藤敬一（1927？－1991。俳号・山椒魚、後に石枕）である。加藤は日本の俳句結社「春燈」の会員であり⁽⁸⁾、グラフィックデザイナーで、招かれて1973年

(7) 黄靈芝『台湾俳句歳時記』、言叢社、2003年、287頁。

(8) 「春燈俳句会」は久保田万太郎・安住敦らによって

1946年に発足した。俳誌『春燈』による俳句結社である。

10月に台湾に渡った。彼は台北俳句会のことを知り、人を介して参加したい旨申し入れた。そこで黄靈芝から『台北俳句集第7集』を贈られ、また句会にも一度参加したが、これに満足しなかったためか、台北俳句会には入会せず、独立に春燈系の句会を開いて、逆に台北俳句会を呼び込むことになった。彼はまず台北俳句会の一会員と知り合い、二人で句会を始めたが、やがてこれに他の台北俳句会会員も参加するようになって、1980年（昭和55年）8月、「春燈台北句会」が正式に発足した。この句会は今日まで存続し、毎月句会を開いている。なお最初から春燈だけの会員はいるが、台北俳句会から参加した人はその後も春燈と台北俳句会の両方に続けて参加している。

『春燈』に最初に載った会員の句は次のようである。

加藤山椒魚（『春燈』昭和五五年九月号四句欄）

万緑の漲る水に顔洗ふ
花合歓や巴士来て客を集め去る
花棟去年眼を病みし師のいかに
実梅漬く老妻苦勞いまだ絶えず

陳蘭美（同三句欄）

炎天のビルの窓窓昏むかな
忘れたき過去を紅濃き夾竹桃
ありありと西瓜のまるさの包みかな

頼天河（同三句欄）

時の日や父よりも良き子の時計
喪服着て男不器用に汗拭ふ
一瞬の殺意の蟻を潰しけり

陳継森（同二句欄）

野に川が白く夏星団欒す
蝉しぐれ昼の枕を凹まする

呂鵲城（『春燈』昭和五五

年十月号三句欄）

籐椅子にあまりて婢睡り居り
籐椅子に星いっぱい空がある
田植女に白鷺降りて昏れしかな

加藤は前節末で見たような台北俳句会の問題点を感じとっていたように思われる。

1)「お遊び」について：それまで庶民の言葉遊びでしかなかった俳諧を芸術の域にまで高めたのが芭蕉だとされている。この場合の俳諧は俳句よりむしろ連句なのだが、兎も角「お遊び」が「芸術」の前段階にあると同時に、一般庶民の楽しみとしての俳句を「お遊び」と「芸術」に峻別できるかどうかは難しいところだろう。黄靈芝は会員の「参加の動機」は「若き日への郷愁。日本語しか喋れないもの。だってAさんに誘われたから。なにやらの文芸的憧れ。…」などを挙げている⁽⁹⁾。特に台北俳句会の場合、参加者は世代的に孤立させられた「日本語人」であるから、社交的な動機は一層強められよう。会員をつなぎとめるのにそれは不可欠だった。

加藤は一度か二度台北俳句会に参加したが、その時句会を「遊び半分に行っている」ように映ったのも無理からぬところだろう。彼はその後句会に参加しなくなったわけを、「自分はクリスチャンであり、日曜日は教会に行くから日曜日に開かれる句会には出にくい」と言っていたらしいが、「出席せずに投句するだけでもいい」という誘いも断ったというから、それだけが理由だったとは考えにくい。また加藤が台北俳句会と初めて接触したのは1978年ごろで、まだ会員のほとんどが台北歌壇のメンバーと重なっていた。呉建堂の短歌指導は、彼の得意な剣道の指南のように厳しかったことで知られている。その反動もあって、俳句はどうせ余技だ、

(9) 黄靈芝『台湾俳句歳時記』287頁。

気楽にやろう、というような雰囲気があってもおかしくない。

2) 俳句の質(短歌的俳句)について:加藤は当時の台北俳句会の俳句のレベルをあまり評価していなかったようだ。黄霊芝は加藤に『台北俳句集第7集』を贈ったが、これに返礼しなかったという。「台北俳句会とるに足らずと思っただのかも知れません」と黄霊芝はある会員あての書簡で述べている。句会にも一二度出席しただけだった。「当時は(台北俳句会の)会員の実力がまだまだだったので、(加藤さんは)がっかりされたのではないか」とある会員は言っている。事実加藤は後で紹介者に「たいしたことなかった」と言ったという。

いっぽう加藤は春燈の句会で重要な指導方針を打ち出している。それは「俳句と短歌を両方してはいけない」というものだった。当時の台北俳句会員はほとんどが短歌と俳句の両方を行っていたが、この加藤の方針によってか、短歌を止めて俳句に専念するものも出てきたのである。「短歌の半分」ではない(ほんものの?)俳句をめざしていたのが春燈に集まった会員ではなかったろうか。

会員の俳句を「短歌の半分だ」といって批判していた黄霊芝としては、本当は加藤のように「短歌と俳句を両方やってはいけない」といいかけたのかもしれない。だが台北俳句会の発足の事情からしても、また現に呉建堂始め巫永福・頼天河など戦前からの歌人(台北歌壇の重鎮)が揃って俳句会に参加している状況からしても、それを直接口にするには出来なかったろう。そういうしがらみのない春燈俳句会の会員だからこそ、加藤は忌憚なくそう言えたのではなかったか。

3) 俳句の指導(句会運営)について:黄霊芝は句会で「遠慮」していてあまりはっきり物を言わなかった、「いくら頼んでも俳句について意見を言ってくれなかった」と台北俳句会の

古い会員はいう。これに対して加藤は句の指導においてもう少し实际的だったようだ。

もっとも加藤は台北俳句会からの参加者には添削など指導めいたことはしなかったという。彼らは「お遊び」の句会にあきたらぬ少数の熱心党で、中には頼天河や呂鵲城など戦前からの俳人も含まれており、加藤と彼らとは師弟ではなく同志の関係だった。一方加藤は教会関係者から数人の初心者を募り、彼らに対しては懇切丁寧な指導をしたという。こうして春燈台北句会には台北俳句会系と生え抜きの春燈系の二層の会員が生まれることになったのである。

生え抜き系の会員によれば、加藤は句会でよく褒めたという。「アイデアがいい」とか「よくやった」とか、「あなたらしい」とか。あるいは「自分の仕事のことを詠んでごらん」と、その人にふさわしい句を作るように誘いかけている。また加藤の家で句会をすると、加藤夫人は朗らかな人で、自分も一時期俳句をしたし、おやつによくぜんざいを出してくれたというようなことも、句会の雰囲気のをやかなものにしていたと思われる。

だが、このような句会のあり方もさることながら、やはり機関誌『春燈』への毎月の投句が重要だったのではあるまいか。投句が主宰(当時は安住敦/成瀬桜桃子)によって選句され、何句掲載されるか日本全国の会員を含めて相互に競いあうということは、俳句会としてはごく当然のことながら、会誌がなく完全に内に籠った台北俳句会とは異なる技の磨き方が可能である。それは必然的に身近な仲間内でも(二句欄・三句欄・四句欄などのどの欄に掲載されるかで)順位を毎月競いあい、相互に研鑽しあう結果を招く春燈の句会に熱心に参加する会員のいることは台北俳句会にとっても刺激になったと思われる⁽¹⁰⁾。こうした動きを黄霊芝はむしろ歓迎していたように見える。

台湾に春燈の句会を拓いた加藤は、1984年7

月に10年余り滞在した台湾をある事情で去ることになった。その後も台北春燈句会は存続し、会員は漸増した。ある会員は「参加者は10名前後で、一番盛んな時にも20名には達しなかった」といっている。『春燈』1985年12月号には、台北から17名の投句があるが、この時点でほぼその状況に達していた。加藤の去った後、会の代表は陳継森・頼天河・陳錫恭・廖運藩と順に引き継がれ今日に至っているが、全員が台北俳句会の主要な会員であるところにこの句会の特質がよく現れている。

5. 燕巢俳句会との関係——台湾歳時記の編纂と刊行をめぐる——

最後の4) 台湾俳句の独自性を何処に求めるか、という問題の一つの切り口は、俳句に不可欠な季語を台湾独自のものに求める、つまり「台湾季語」を制定し、それを集約して「台湾歳時記」を編纂することであった。これは偶然ながら、日本の燕巢俳句会との協力によって行われることとなった。

台北俳句会の活動は日本においては主として黄靈芝『台湾俳句歳時記』（言叢社、2003年）によって知られているといつてよい。本来は『台北俳句集』によって知られるべきであろうが、台湾発行の私家版であるから日本ではほとんど知られることがない。そこで一般には、日本で発行されたこの歳時記が事実上唯一のチャンネルになっている。しかもこの書は極めてユニークである。それは「台湾季語」を通じて、黄靈芝がこれまで提起してきた台湾俳句のアイデン

ティティを確認する手立てを確立しているからである⁽¹¹⁾。

「台湾季語」の編纂を可能にしたのは「燕巢俳句会」とのかかりである。黄靈芝は既に『台北俳句集』第9集で俳句の「台湾化」につながる主張をしているが、これは「台湾人が日本語で俳句を詠む必然性」つまり俳句における台湾的アイデンティティの問題である。伝統俳句は季節感、したがって季語を重視するから、その適用において日本とはかなり隔たりが生ずる。独自の季節感のある台湾では、当然「台湾季語」があるべきだということは、戦前の日本統治期から既に多くの日本俳人の中で問題になっていたが、明治期の小林里平『台湾歳時記』（1910年）以来、本格的なものがなかった。一方燕巢俳句会の主宰・羽田岳水も台湾季語の問題に興味を持っていた。『燕巢』1988年6月号には戦前台中で俳誌『竹鷄』（テッケイ）を刊行していた阿川燕城がこの問題を論じた「台湾の季感」を寄稿している。

『台湾俳句歳時記』はこの問題に正面から応えた画期的な業績である。全部で396の台湾季語（正題季語）を制定し、各8句ずつの例句と336字分の解説をつけて編集したもので、言語的にも台湾語の季語が220項目と過半数を占め、日本語が161項目、客家語が2項目、中国語（北京語）が13項目と多岐に渡っている。その基礎となったのが、当時羽田岳水が主宰していた燕巢俳句会の俳誌『燕巢』に1989年12月号から1998年9月号まで、連載された「台湾歳時記」である⁽¹²⁾。これは台湾季語の解説と例句を毎号4項目（最初のころは1～3項目）

↘(10) 事実彼らの投句が掲載される欄は毎月めまぐるしく変わった。ある会員は「ふつう三句欄で、四句欄に入るのはいへんだ。入るとビールで乾杯して祝い合った」と述べている。

(11) 磯田一雄「黄靈芝の俳句観と《台湾俳句》」『成城文藝』第201号2007年12月、36-44頁。

(12) 燕巢俳句会は大府豊中市の俳句結社。1956年創

刊、2010年廃刊。主宰・羽田岳水（1918＝大正7年、山梨県生、2011年没）は、戦前期台湾で師範学校を卒業し台中で女子公学校の教師となり、その間教師を中心とした俳句活動に参加、戦後『燕巢』創刊と同時に同人となり、1986年より主宰。台湾での学友・杜文祥を通じて黄靈芝を知り、台北俳句会との交流を深めるに至る。

の割合で構成したものであり、この間台北俳句会の例会では台湾季語が4項目ずつ毎月兼題として出されていた(当季自由詠の句の出句も認められてはいたが)。

ただし『燕巢』に連載されたものがそのまま著書として刊行されたのではない。連載された季題(正題季語)は378項目(ほかに杜文祥によるものが1項目)であり、内容的にも連載と刊行された著書とはかなりの差がある。まず連載でのタイトルは「台湾歳時記」だった。また各項目の記述内容と例句は、項目にもよるが連載と『台湾俳句歳時記』とでの違いがかなりある。特に早い段階で連載された項目のほうが概して違いが大きい⁽¹³⁾。

ではどんな項目が台湾季語とされたのか。『燕巢』1990年1月号～5月号に掲載された、黄霊芝の手になる最初の10項目を挙げよう。

分類	正題季語	副題季語 (別の言い方)
新年…時候	新正	新正月・新年
新年…植物	霊芝	桂芝・芝草・石耳など8語
冬 …生活	補冬 <small>(ポータン)</small>	菜喰・菜獣
新春…時候	旧正月	新春・初春・春聯・爆竹など9語
春 …植物	胡蝶蘭	胡蝶蘭・フェレノプシスほか6語
春 …植物	昭和草	神仙菜 <small>(シンセンツァイ)</small> ・

(13) 第一回の「さしば」(1989年12月号)は黄霊芝によるものではなく、『台湾俳句歳時記』では完全に書き換えられている。第二回以降はすべて黄霊芝の執筆だが、解説文の長さや例句数が基本的に定まるのは第4回(1990年3月号)以降で、各項目とも解説文330字、例句8句ずつとなり、このスタイルが『台湾俳句歳時記』にも引き継がれている。なお前掲岡崎郁子『黄霊芝物語——ある日文台湾作家の軌跡』62-66頁参照。

(14) ことに目立つのは次の箇所である。連載では「…戦後、漢人の建設した民国へ復帰した台湾人の喜びは大きかった。現実には世はもはや明の昔であろうはず

		野木耳 <small>(ヤーボンニイ)</small>
春 …行事	媽祖	媽祖生 <small>(マーツォーシイ)</small> ・迎媽祖 <small>(ギイアーマーツォ)</small>
春 …行事	清明節	清明 <small>(チインピイン)</small> ・墓參・展墓・掃墓節・墓洗ふ
春 …動物	ベタコ	シロガシラ・ペェ タウコッ
春 …動物	画眉 <small>(ホエビ)</small>	ホイビイ・画眉 <small>(ファーマイ)</small> など4語

『燕巢』連載時の「台湾歳時記」と刊行された『台湾俳句歳時記』(以下「著書」と略記)とでの最も基本的な違いは分類である。連載では新年・春・夏・秋・冬という日本の俳句歳時記の伝統的な様式に従っていたが、著書ではこれを人事、自然・天文現象、自然・動物、自然・植物に大きく四分類し、季節も春夏秋冬ではなく、暖かい頃・暑い頃・涼しい頃・寒い頃と分けている。ただし人事にはこれに年末年始が加わり、自然・天文現象はこの分類に従わない。

解説文の内容は、連載時と著書とで、大いに変わったものとほとんど変わらないもの、あるいは共通性の多いものがあり、必ずしも先に連載されたものほど違いが大きいとはいえないので、個々の季語ごとに見ていく必要がある。例えば1991年12月号に「秋・行事」として連載された四項目、「光復節・豊年祭・孔子祭・重九節」を見ると、「光復節」は解説文が微妙に変化し⁽¹⁴⁾、例句8句のうち2句入れ替え。「孔

はなかったが、とまれ、十月二十五日、光復節が定着した。慶典のほか遊芸や花火が揚げられ、翌日から全島の運動会がはじまる」とあったのが、著書では「台湾人が日本の五〇年にわたる植民統治から解放された記念日。そしてもう一つの植民統治がはじまったともいう。…とまれ、今日、陽暦十月二十五日の光復節には国旗がはためく。慶典、花火、運動会…したが無口の方も万千人を数えるよし」と変わる。国民党批判がタブーとされた戒厳令が撤廃されて間もない頃と、それが気兼ねなしに行えるようになった十数年後の台湾社会との差の反映か。

子節」は解説・例句とも完全に書き換え・入れ替え。「豊年祭」と「重九節」は、後者が「重陽節」とタイトルを改めているが、解説文はほとんど不変、例句のうち岳水の選んだ4句のうち1句がどちらも黄霊芝の句に代わっているといった具合である。

余り目立たないが、連載時と著書とでの最大の違いはむしろ例句にあるとあっていい。まず連載の最初の頃は羽田岳水が例句を全部選句し、台湾人の句も羽田岳水が添削したりしていたようだが、協議の上句の添削はしないことにして、黄霊芝と岳水が4句ずつ選び、岳水選の句はその旨句の下部に表示することになった。その区分も著書ではなくなっている。また連載時は黄霊芝の句が例句にほとんど含まれていなかったのが、著書では全項目の例句に黄霊芝の句が必ず1句入っている。それは出版社側から「台湾的な例句が少なすぎる」というクレームが付いたため、黄霊芝がつとめて「台湾的な句」を作って入れたためである。このように「台湾歳時記」の編纂では、はじめ羽田岳水＝燕巢俳句会側の関与が大きかったが、少しずつ黄霊芝＝台北俳句会側が、編纂に主体的となり、最終的に著書となった段階で台湾性が十分に発揮されるようになる過程が興味深い。

そもそもこの「台湾歳時記」の企画は、最初燕巢側のほうが積極的だった。黄霊芝はこの事業の負担の大きさを考慮して初め慎重だったが、燕巢側でさっさと企画を公表してしまったため、参加せざるを得なくなった様子も見られる。この企画は一見台北俳句会にとってメリットのように見えるが、実は燕巢にとっても一つの特徴を出せる「目玉」になりうると考えられたのではないか。実際羽田岳水は日本俳人のための読み物として台湾のことをたくさん入れたがり、また日本俳人の吟行句を多く入れたがっていた。一方黄霊芝にとってはそういう「観光客」の句ではなく、台湾人の生活に根ざした句

を多く入れようとした。このことは収録されている日本人の句と台湾人の句の違いにも現れている。

こういう食い違いはあったものの、兎も角この「協力関係」は9年間続いたのだから、互いに相当な努力と譲歩をしたであろうし、究極的には双務的な組織と組織との協力関係であったとあってよからう。

もうひとつ重要なことは『燕巢』誌が黄霊芝の俳句論の発表の場となったことである。これは機関誌を持たない台北俳句会にとってはきわめて重要な意味があった。初めのうち黄霊芝は請われるままに『台北俳句集』の「あとがき」を『燕巢』に転載していたのだが、そのうちに『燕巢』に載せた俳句論を、逆に『台北俳句集』の「あとがき」に使用するようになった。その結果「あとがき」がだんだん長くなり、第26集(2000年6月)では本文(俳句集)122ページ(61人分)に対し、「あとがき」がなんと83ページと本文の三分の二にも達している。「日本文化の原点——とんちんかん論法での」と名づけるこの長大なあとがきは、『燕巢』1999年4月号から12月号に8回に涉って連載されたものだった。

『燕巢』はこのように台北俳句会と縁の深い俳句結社ではあったが、主宰・羽田岳水の高齢化と後継者問題の不調から、2010年末限りで廃刊となった。一時期はかなり多かった台北俳句会員の参加も次第に減少し、廃刊直前には台湾からの投句もほとんどなくなっており、両結社間の関係は自然死的な終末を迎えたのであった。

6. 終わりに：日本俳句の普遍性と台湾俳句の独自性の相克ないし緊張関係

台北俳句会がこれまで発展してくる過程で、何らかの交流のあった日本の俳句結社は少なくない。会誌を送って来たことのある結社だけで

20社に上る⁽¹⁵⁾。主宰や同人が会員を引き連れて來台し、合同句会を催すこともある。だが定期的に会員の中にまで入り込んで俳句活動との関わりを持ったことのある結社は、ここに挙げた三社のみであろう。そこで目に付くのは、源泉としての日本俳句に由来する普遍性の獲得と、台湾俳句としての独自性の発揮との相克(というのが不適切であれば「緊張関係」であったように思われる。むろん両者は理念上本来矛盾・対立するものではないはずだが、現実には個々の句作においても、結社の内部においても、さらには結社相互間においても、一方が他方に優位する、あるいは他方を抑圧するような関係が生まれ、容易には解消されなかったように思われる。

例えばその典型が黄靈芝のいう「短歌の半分でしかない俳句」の問題であろう。俳句は短歌のほぼ半分の長さしかないが、それにもかかわらず短歌一首に匹敵する内容を持った詩とせねばならない、という課題に応えることの困難さが、台湾俳句において独自性と普遍性の統一を阻む第一の内在的要因だということである。これは結社自体に内在する問題であるが、ここに『春燈』が関わってくる主要な理由があったと思われる。

また台湾季語を用いることは確かに台湾の独自性の表現につながるが、それは台湾で詠まれている句の実態に即応しているのだろうか。最近の『台湾俳句集』を見ても台湾季語を用いた句は必ずしも多くない。月々の例会の出句にも台湾季語を用いた作例も決して多くない。黄靈芝自身の句にも台湾季語を用いた句が多いとは

いえない。『台湾俳句歳時記』の例句はむしろ特殊な場合に見えてくる。しかしこの点については黄靈芝自身も余り明確な回答をしていない⁽¹⁶⁾。つまり台北俳句会で詠まれる句全体から見れば、どうしても日本的普遍性に台湾的独自性が従属している感がある。このこと自体はいかんともしがたいことであろうか。

これには幾つかの要因が考えられる。第一に、俳句に「台湾色」をもたらす前提となる「台湾アイデンティティ」をどのようにとらえるかである。黄俊傑によれば、「台湾アイデンティティ」においては、文化アイデンティティと政治アイデンティティとが不可分であるとされる⁽¹⁷⁾。台湾季語はそのほとんどが文化的アイデンティティの領域に局限されており、政治的アイデンティティと関わるような季語はせいぜい「二二八」くらいであろう。またかつては台湾歌壇も台北俳句会も同じように「政治を持ち込まない」ように戒めていた。戒厳令下においては保身上至極当然のことであったが、歌壇や川柳会とは異なり、俳句会は戒厳令撤廃後も依然としてこれを守っている。そうすると政治的アイデンティティと関わる句は詠みにくいことから、必然的に台湾的な句を詠もうとする動機が減少するのではなからうか。有季定型の俳句は川柳や短歌に比してもともと政治的状況を詠みにくいのだが。

第二により大きな問題として、「農業社会から工業社会への転換」「教育の拡大」「政治的民主化」など戦後の台湾社会の発展状況のもたらした「台湾新文化における個性性の覚醒」という現象が背後にあるのではないか⁽¹⁸⁾。「自己の

(15) 前掲岡崎郁子『黄靈芝物語』53頁。そのうち主な結社は『燕巢』のほか、『霽』『ひいらぎ』『濱』『かつらぎ』『耕』『山彦』『なると』『花鳥』『伊豆』などであろう。『春燈』とは公的な交流はなかった。

(16) 前掲・磯田一雄「黄靈芝の俳句観と《台湾俳句》」、42頁。

(17) 黄俊傑・白井進訳『台湾意識と台湾文化——台湾

におけるアイデンティティの歴史の変遷——』、東方書店、2008年、第二章「《台湾意識》における《文化的アイデンティティ》と《政治的アイデンティティ》との関係」。

(18) 同書、第五章「戦後台湾に置ける文化変遷の主要方向——個性性の覚醒とその問題」。

ための個体」という意識が強まれば、詠まれる俳句もおのずから自己中心的となり、社会状況や文化状況と関連させる意識が薄くなるのではないかと考えられる。

さらに台湾が多言語社会であることも関係している。『台湾俳句歳時記』の台湾季語にはいわゆる台湾語（閩南語）系の語が非常に多いのに、客家語の台湾季語はほとんどない。それで客家系の台湾俳人は必然的に台湾季語の句を詠まなくなるのだ、という指摘がある⁽¹⁹⁾。

なお人事句の多いのが台湾俳句の独自性のようにとらえる向きもあるが、日本の俳壇でもたとえば春燈は燕巢よりも人事句が多い傾向にあるし、また『台北俳句集』を見ると、人事句の割合は俳人によってかなりの相違があり台湾的独自性として一般化するのは難しい。概していえば短歌系の人は人事句が多いという傾向はある程度認められるので、これは「短歌的俳句」の特徴といえないこともない。そしてそういう人の多いのが台湾俳壇の特徴である、とすると改めて俳句における台湾的独自性とは何かが問われることになるだろう。

だがこうしたことは台湾俳句にとって決して

マイナスの現象ではないと考えられる。このような相克ないし緊張関係があってもこそ却って生き生きとした表現が生まれるのではあるまいか。俳句もまた生活表現であるとすれば、こうした問題こそが台湾俳句を今日まで継続させてきた動因だったともいえるのではなからうか。

以上拙論では台湾の俳句活動をめぐる枠組みの問題に終始した。その上に立って、指導者のみならず、一般会員の実際の句作を対象とした考察を綿密に行う必要があるが、これは次の機会の課題としたい。いずれにせよ、これは戦後日台間の生産的な文化交流の一環として、今後も引き続き究明されるに値する課題であろう。

あとがき：本稿は2011年10月5日アジア研究所月例研究会の発表要旨に、研究会における討論の内容などを参照して加筆したものである。資料としては俳句集や俳誌などとともに、多くの関係者からの聞き取りに基づいているが、原則として個人名は省略させていただいた。また敬称もすべて省略させていただいたことをお断りしておく。

(19) 『台湾俳句歳時記』に掲載されている台湾語の正題季語数は220、副題季語数は325あるのに、客家語ではそれぞれ2語ずつしかない。中国語（北京語）の正題季語は13しかないが、副題季語は105あり、日本語では161と502、というように言語ごとの偏りが大

きい（李淑貞『黄靈芝文学之研究——以《台湾俳句歳時記》为中心』中国文化大学日本語文学研究所碩士論文、2006年、124頁）。

資料：『台北俳句集』の内容／表題一覧

本文（投句者数）＋前書／後書ページ数	「表題」または内容の要点	発行年月
第1集 50（25人）＋1 ㊦	ごく短い形式的まえがき	1971年10月
第2集 48（24人）＋1	同	1972年10月
第3集 58（29人）＋1	同	1974年1月
第4集 56（28人）＋1	同	1975年1月
第5集 50（25人）＋1	最初の批判的言辞	1976年1月
第6集 58（29人）＋3	句の良否の判定例句	1977年1月
第7集 60（30人）＋7	日本語批判（異言語の句登場）	1978年2月
第8集 74（37人）＋10	言語道具論（革命的な句）	1979年2月
第9集 94（47人）＋3	日本趣味追随批判（湾俳登場）	1980年2月
第10集 114（57人）＋5	短歌の半分論（和句での革新）	1981年4月
第11集 132（66人）＋7	盗作（剽窃）論	1982年4月
第12集 148（74人）＋4	歌われる詩歌・書かれる詩歌	1983年4月
第13集 130（65人）＋11	季語論	1984年7月
第14集 130（65人）＋2	群の遊びとルール	1985年7月
第15集 134（67人）＋3	台北句会十五周年	不明（奥付欠）
第16集 146（73人）＋5	新旧ちゃんぼん論	1987年8月
第17集 146（73人）＋4	個性の喪失	1988年8月
第18集 136（68人）＋6	俳句の前書と句評	1989年8月
第19集 128（64人）＋30	「《自句自解》と《短歌の半分》」	1991年3月
第20集 120（60人）＋15	「俳句歳時記について」	1992年5月
第21集 136（68人）＋9 *	日本文化と貧	1993年2月
第22集 136（68人）＋38 *	「ありがね問題のいくつか—国際交流での」	1994年6月
第23集 134（67人）＋30 *	「文法一間違っているかもしれませんが」	1995年10月
第24集 128（64人）＋27 *	「台湾歳時記と台湾季語」	1997年3月
第25集 124（62人）＋59 *	「戦後の台湾俳句—日本語と漢語での」	1998年12月
第26集 122（61人）＋83	「日本文化の原点—とんちんかん論法での」	2000年6月
第27集 134（67人）＋1 #	ごく短い「附記」	2000年12月
第28集 132（66人）＋2	短い説明的「後記」	2001年10月
第29集 122（61人）＋1 #	ごく短い「後記」	2002年1月
第30集 112（56人）＋1 #	ごく短い「後記」	2003年6月
第31集 116（58人）＋1 #	ごく短い「後記」	2003年8月
第32集 104（52人）＋2＋7	「第三回正岡子規国際俳句賞受賞に際し」	2005年7月
第33集 100（50人）＋1	短い形式的「あとがき」	2006年7月
第34集 112（56人）＋4	解題的「あとがき」	2007年9月
第35集 106（53人）＋5	断想的「あとがき」	2008年3月
第36集 110（55人）＋8	回想的「あとがき」	2009年5月
第37集 104（52人）＋2	短い形式的「あとがき」	2011年9月

#以外の「はじめに」「あとがき」は黄灵芝が執筆。*は台湾季語の解説を含む。